

草莽の画家金井蟻村についての覚書

—松本平手習師匠「金井忠蔵」考—

はじめに

多年にわたる信州松本藩山家組湯原村の歴史的(1)研究にさいし、常に関心を抱きながら、文献資料の僅少な(2)こと、伝聞及び遺作を採訪する余暇を得ないことのため、かねてその希望を公けにしながらも、成果をまとめて発表することができずにいた懸案として、幕末期松本藩城の、上は武家から、下は「手習師匠」に至る知識人たちの動向を見通しながら、山家組及びその周辺における民間知識人たちの思想・文芸・美術活動の一端としての画家金井蟻村の足跡を辿る仕事があった。今なお多くのことが調査未了のままではあるが、自身の研究に一段階を劃すると同時に、関連研究者たちの関心を高めるために、敢て本稿を草して、これまで調査した成果を記述するとともに、流布している誤伝をも正しておきたいと思う。

金井 圓

一 飯沼源次郎のイメージ

『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』別篇人名の末尾に明治十六年現在の「東筑摩松本市家塾・寺小屋一覽表」があり、里山辺の末尾に「西家、金井忠蔵」の名が見えるが、塾舎の名称所在地・開設廃止年次・生徒数いずれも空欄とし、従ってこの人名辭典の本文には名を表わさない。その一覽表の片隅に、情報不足のまま名のみ挙げられたこの人物については、しかし、大正一三年刊行の飯沼源次郎編「松本平手習師匠」に、次の記事がある。

金井忠蔵翁

松本領筑摩郡山家組湯原村の人、家紋谷文字は外縁谷氏に因めるなり。谷氏は丹波山家藩の重臣なり、慶安平受の祖に長作あり、世々耕耘に勉めて邑務に與かり、翁に至り書画を嗜み特に画を以て名あり。蟻村と号す。碧鳳を師とし、尤も俳画に長ぜ

り、翁を慕ふて弟子とく来る。指導三年出で、京都に遊び、医と画を記澤白井調水に学び画名頻りに著はる、好んで諸國の名勝を探り、四方の名士に交りて雅泊なり。時の大庄屋藤井氏能く文を属して竹村と稱す、無二の雅友にして又唯一の酒敵なり、父忠四郎は松本藩の御用馬を掌り、常に中駿北越に往来して、同職の頭領たり。蟻昇永明治の副戸長を拜して村政を執り、又常に温泉の発展を謀ることに勉めたり。蟻孫忠四郎日清の役軍曹たり。後職を小学に奉ず、今や家職を守りて現存たり。

記事は、家系に関すること、忠蔵自身のこと、父及び蟻子嫡孫のことの三部から成るが、文章の措辞構成に意をつくしている一方で典拠をまったく挙げてない。強いて典拠を求めらるなら、それは文中に見える「蟻孫忠四郎」の談話に過ぎず、そこには伝聞の誤りや独断さえも含まれていたと考えざるを得ない。先ずその伝聞の当否の概略を史料に即して明らかにしたい。

見出し語の適否については後に述べることとしたい。通例の紋鑑に見えない、剣かたばみ型の対象軸に谷の字を三つ背中合わせにした独創的な家紋が「丹波山家藩の重臣谷氏に由来する」というのは蟻孫忠四郎の伝聞にない独断と思われるがしばらく措く。祖先を慶安檢地筆受の「長作」に求めることは、慶安四年(一六五二)の湯原村檢地帳(※C111)末尾の屋敷地の明治初年の符箋と一致するが、この村の村役人を勤めたことは、天保二年(一八三一)以後、庄屋小林家(藤屋)のもと

でせいぜい二代の間(組頭)を勤めた以外にはまったくない。慶安檢地帳「長作」の村内限りの田畑持高は五反九畝余で村内中位であり、弘化二年(一八四五)の諸事書上帳(※A111)でもこの家は他村への出作分をも含めて四石七斗余で村内四九戸中第二九位を占める高持百姓であるに過ぎない。

第二の「忠蔵」自身については、書画を嗜み、とくに画家として著名で、「蟻村」と号したとし、当初は安藤碧鳳を師とし、俳画に優れ、自らも門弟を教えたとするが、碧鳳については識者の教えを乞いたい。一方、果して読み書き算盤の寺小屋を設けたかどうか、確証を得ない。地元で三年教えてのち京都に遊学し、医学と絵画を紀州藩の白井調水に学び、諸國の名勝を訪ね、四方の名士と交わったというのも確証がまだ得られない。しかし、山家組大庄屋藤井佐左衛門竹村を雅友・酒敵としたというのは充分あり得ることである。

土掲の「別篇人名」の部にもあるように、竹村は享和二年(一八〇二)岡田組岡田村金井家に生まれ、文政一四年(一八一七)一七歳のとき藤井家の養子となり、絵画を木沢天童に、詩文を芳川波山に、国学を正親町三条実愛に、史学を頼山陽に学び、さらに神道を古川氏に、弾を洞門・雪嶺二師に学び、竹村(竹郎)、篁斎と号し、名を親憑といった。維新後、尾川学校校長を勤め、明治五年(一八七二)八八歳で亡くなった。山家組桐原村出身の蘭方医桐原鳳卿を詩友としたというが、

藤岡筑郎『信濃路の俳人たち』（信濃毎日新聞社発行より）

作品解説

画題「十二夜」

（藤）山家 垣あれて月三昧の十二夜

画題「白河の関」

白川（河）の関にて卯の花をかざして関のはれ着哉

風流のはじめやおくの田うへうた

芭蕉翁及曾良奥羽紀行之写意

（曾良の句）

（芭蕉の句）

岩本琴斎

（安永五年―嘉永二年）
（一七七六―一八四九）

真志野村（現諏訪市）の人で、本名は正方、通称を後蔵といひ、楽只等の名もあつた。号は琴斎のほか洞雲ともいつた。慶長年ころの先祖に、孤松という京都では上手の画人がおり、その子正倫も狩野安信に学んで知られ、代々画才のある家系であつた。琴斎は、藩主諏訪忠肅に仕え勘定方をつとめていたが、生来画をよくし、江戸詰のとき文政元年（一八一八）に、文晁の高弟岡田閑林について技をみかいた。更に文晁に師事し、諏訪に帰国中も文通がたえず、文晁との合作が北真志野の岩本家にのこっている。

文政一〇年（一八二七）に藩主忠恕の命をうけ、江戸の親世太夫家の能舞台の図を看取つて帰り、新造の諏訪家の能舞台に松の画を描いた。現在温泉寺本堂にのこるものである。このほか命をうけて城内の横・屏

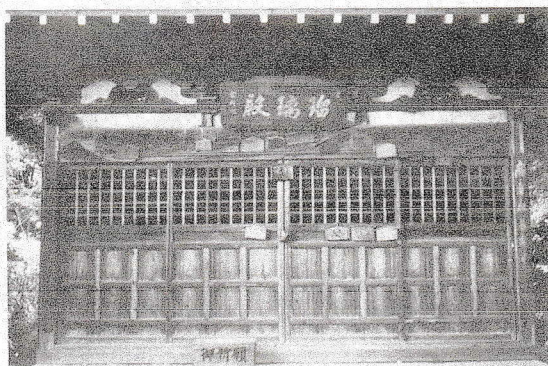
風、調度品等を作成した。嘉永二年八月七歳で没した。（以上概略、諏訪の近世史に拠つた）

「諏訪史概説」の著者山田茂保は、岩本家にある掛幅一〇点ほどを撮影し、子の教夫に伝えている。これらは琴斎作及び琴斎に関係するもので、画は文人画であり一七〇年ほど前を知る貴重な資料でもある。自画像、山水図、竹人物図（菊池五山賛）、花下人物図（遠山松徳賛）が主なもの、ほかに安藤碧鳳・矢島鑑湖との合作があり、また文晁の山水図、その門人大西圭齋・岡田閑林・渡辺玄村の作品がある。

矢島鑑湖

（文化四年―慶応四年）
（一八〇七―一八六八）

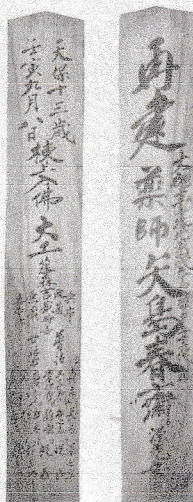
鑑湖の家は、代々武家であつて、諏訪に在つては四賀神戸に住み、高島藩に仕えていたが、鑑湖の父春意（久左衛門光信）は藩医小寺維明の



「薬師堂」（真志野善光寺）

門に入り医学を修め、真志野に招かれてそこで医業を営むかたわら、寺小屋を開いた。矢島家私塾。鑑湖は文化四年此の地に生れ、春意・生々堂などともいひ医を業とし、寺小屋の師匠でもあつた。医業のかたわら絵を越後の嵐溪に学び、又大岡雲峰・谷文晁等についても教えを受け鑑湖と号し一家をなし、幕末の南宋画人として諏訪の第一人者であつた。

藩公の寵を受け、藩主の菩提寺である頼岳寺の障壁面を作つたが、そのとき佐藤一斎や松島北渚は詩文をよせて激賞したほどの作であつた。然し寺は、明治三四年二月一日、祝融の災に遭ひ伽藍は烏有に帰した。僅かに運び出され焼失をまぬがれた鶴之図（写・真、山水屏風は、現在でも大切に寺の行事に使用されている。又花鳥を描いた杉戸の一部分が法光寺に移されている。高国寺には薬師堂の天井絵に鶴の図もあり長年香を焚いた煙りで黒ずんでいる。諏訪大社上社の千羽鶴の扁額も、同じ形をした鶴はいないと言われ、退筆塚銘（後記）中にも書かれているように、鑑湖の力作であつたと思われる。もとは神楽殿に、高く掲げられていたが、戦後暫くして絵馬堂に移され、現在ではかなり損傷がみられる。竜雲寺の位牌堂の「天女図」（写・真）も、中央高速道路開通による移転で損傷を受けている。又、郷土史家細川準人先生が、史談会の折に案内された野明神社の舞屋の掛簾に使われた「義経の八艘飛び」と「松」の絵の大きな幕があり、又、区の所有として畳六帖敷程の大きな「村の地図」があり、当時村人の生活にかかわつて居た事がうかがわれる。又、真志野善光寺で、昭和四〇年に薬師堂の屋根のふき替えを行った処、陳札が



伊那谷南画の系譜を池大雅来訪より238年にのぼり
一冊にまとめた南画の教本『伊那谷南画集』発刊なる!!
文化遺産として郷土に誇れる珠玉の作品集

予約限定出版750冊

平成10年7月末締切

定価 22,000円(税込)

予約特価 18,000円(税込)

伊那谷南画集

— 二世紀半に至る画人の系譜 —

伊那谷南画の

代表作品を一挙掲載

約140点の秀作を収録

A4変形

縦267mm X 横290mm

総176ページ

上製本 化粧ケース入

編著者

原 彰一

肥後耕寿

執筆者

滝澤正幸

榎村洋介

桃澤匡行

刊行会

肥後耕寿

井ノ口八弘

大科八重

熊谷昭人

小西谷力

鈴木冠雄

原 忠司

吉沢 朗

長野県立伊那支部
内務課企画係

伊那谷南画年表

画展の開催

資料 飯田南画協会の紹介／飯田南画協会以外の団体の活動
伊那谷南画出版目録／掲載作品一覧／出品協力者名簿

伊那谷南画の

代表作品を一挙掲載

約140点の秀作を収録

A4変形

縦267mm X 横290mm

総176ページ

上製本 化粧ケース入

◆目次及び執筆者◆

画集 (主要南画家一人につき平均10点)
大雅 文晁 蓬平 芙蓉 蓬山 直入
鉄斎 耕斎 小洲 芝田 白登

伊那谷南画の系譜

【前期】

大雅・文晁・蓬平・芙蓉・蓬山

原 彰一

【後期】

〈第一部〉直入・鉄斎・耕斎・小洲

榎村洋介

〈第二部〉信州の南画における芝田

滝澤正幸

〈第三部〉現代の伊那谷南画

肥後耕寿

【画人年譜】

蓬平・芙蓉・蓬山・耕斎・小洲・芝田・白登

日本画における南画

滝澤正幸

郷土の南画遺作集

下伊那：新井江薄・井伊香溪・井原春岳・上柳平洲

大平蘆平・岡田百練・小木曾玲山・奥村蓬洲

川手米洲・北沢耕雲・木下正洲・木下小麟

木下蘇雲・熊谷龍証・坂井八洲・座光寺為忠

塩沢万象・下平龍郎・橋都大龍・秦 天洲

原 天龍・万場龍水・平栗雲翁・水野陶山

宮沢静居・山田耕雲・吉川疎老・福与悦夫

前沢麓石・渡瀬凌雲・正宗得三郎・嶋田文栄

甲堂九山

上伊那：中村不折・長尾無墨・内田文章・田中亭山

酒井石水・登内景洲・佐野哲機・矢沢晴月

野澤謙斎・有賀月松・眞壁雲郷・山下雪山

馬場折雲・安藤碧鳳

本誌定価

金五〇〇円 年ぎめ五五〇〇円

発行所

飯田市宮ノ上四〇四八

伊那史学会

株式会社 新葉社

〒395-0806 飯田市鼎上山3771-12
TEL.0265-22-4432 FAX.0265-22-3332

(伊那 46(7) (842) 1998-07、伊那史学会編、国立国会図書館)